

雁行

①雁が空を飛ぶときの列の形。《 季語・秋 》

②雁が列をなして飛ぶような斜めに続いていく形で移動したり座ったりすること。

③雁が空を飛ぶときのように、斜めにずらした陣がまえ。 【国語大辞典】

朝から練習して、心地よい疲労感に包まれながらテニス部通信のデスクトップを開く。久し振りに戻ってきた日常の、何と満ち足りていることか。

それはさておき「雁行陣」^{がんこうじん}・・・前衛・後衛に分かれてプレーするダブルスの最もオーソドックスなフォーメーション。しかしこの言葉は2千年以上も昔の中国の書物にも見える、れっきとした軍事用語である。

何千年も昔、中国に国らしいものが作られ始め、やがて領土をめぐる争いが起こり始める。その頃は、軍勢が横一列に並んで攻め込む原始的な陣形が普通に行われていたに違いない。そしてこの原始的横一列陣形には名前もなかった。そんなとき、ある武将が、例えば右端を先頭にして斜めに並んだ軍勢が攻め込む陣形を思いついた。これが雁行陣である。このときの右端、つまり最前線で戦う勇敢な兵士が前衛（forward）。あとに続く後衛の兵士は、常に最前線の戦況を見ながら前に進むのだ。前衛が劣勢になれば、戦力を集中させることもできる。これに対して原始的な横一列陣形の兵士は、真横の遠くの方で戦っている最前線をフォローすることができない。

原始的横一列陣形の弱点は中央。すなわちセンターセオリーだ。雁行陣が横一列陣形のド真ん中に攻撃を仕掛けたとする。前衛が倒されても、雁行陣には2番手3番手が控えている。対する横一列陣形は、前衛の攻撃を凌いで持ちこたえたとしても、雁行陣が次々と繰り出す後続の兵に一度でも破られたら、中央突破を許してしまうことになる。やがて白兵戦の戦術論のようなものが語られ始めると、雁行陣の優位性を説明するためには原始的横一列陣形を引き合いに出さないわけにはいかない。それをとりあえず「並行陣」と呼びましようということになったんじゃないかならうか。

さてテニスの雁行陣は、一人がネット際に、もう一人がベースラインに下がってプレーするフォーメーション（陣形）。この利点は、後衛が前衛の動きを見ながらプレーできること。一方で前衛は後衛の動きを気にせず自由に動き回れること。それにより後衛は前衛の動きをフォローし、またポジションが重なるような無駄な動きを最小限に抑えられること。だから後衛が前衛の動きを把握していなかったり、声によるコミュニケーションが十分に出来ていない雁行陣は、原始的な横一列陣形と何ら違いはない。中央突破（センター攻撃）に易々と陥落することになる。

これだけの文字を費やして、私は今日も「もっと声を出せ！」「もっと動け！」と声からしている・・・♪その声は今、君にも聞こえていますか？